

『切望』

作者 淺羽 一

これは告白だ。それも、きわめて遠回りで、いつそ単なる自己満足でしかないような。けれど、同時に切実な想いであることも事実なのだ。現に、もしもこれらが彼女へと届き、ほんの刹那で良い、馬鹿馬鹿しいと呆れられただけでも構わない、せめて笑ってくれたなら、私はその瞬間に二度と言葉を紡げなくなつたとしても恐れはしないだろう。なぜなら今の私にとって言葉とは、ただただ純粹に、彼女へ自らの想いを伝える為にこそ必要とされる手段なのだから。

一年、たったそれだけであればきつと世の中に幾らでもある話だ。二年、それでもおそろく未練と呼ばれば終わってしまっただろう。三年で呆れられ、五年では女性不信かと心配される。八年になればもう変人扱いだ。

しかし、十年間ずっと想い続けければ、それはきつと真実と呼んで良いのではないだろうか。そしてそれが二十年、三十年と続けばやがて物語になり、そうして生涯ただ一人だけを想い続けた物語は、いつか見知らぬ人々の心にさえ感動を呼び覚ます。それがたとえ、本当に伝えたい相手へとついぞ届けられなかった想いであつたとしても。

：本音を言えば、彼女以外の誰が感動してくれた所で、どうだって良いと思っている。と言うよりも、仮に万人から認められようとも、彼女へ伝わらなければ無意味なのだ。ただ、その一方で、もしも世界中の人間に認められる言葉を生み出せたならば、きつと彼女にもそれを信じてもらえるのではないかという身勝手な期待もしているのだ。

あなたは愛を語ってくれるけれど、それを聞くたびに愛が軽く感じられてしまう。

心を満たす確かな言葉が欲しいのだと寂しそうに語つた彼女へ、そしてまた告げられた愛に微笑みながらも悲しそうに応えた彼女へ、一体どんな言葉こそを贈るべきであつたのか、今でもずっと探している。愛しているかと問われるたびに、愛していると返すだけでなく、そこへどんな言葉を重ねれば想いが真実であると信じてもらえたのか。抱きしめられるだけでは足りず、肌のぬくもりさえも信じ切れず、そうして最後の最後にうわべだけの響きでない本物の言葉にすがつた彼女にとつて、どんな表現こそが理想だつたのか。

果たして、それは一度きりの短い告白だつたのか。それとも、どれだけ疑われようと永遠に繰り返され続ける愛しているであつたのか。或いは、それらは所詮、全てが単なる言葉遊びで、結局は目に見える愛情の結晶こそが必要だつたのか。

今となつては最早、正解を知る術もない。この世界で唯一それを知っていた彼女はもう、共に永遠を過ごすよりも早く、私の前から消えていった。そうして私は世界で一人きり、答の出ない自問自答に身を投じた。

これは告白だ。それも、きわめて遠回りで、いつそ単なる自己満足でしかないような。けれどだからこそ、偽りではない。

一年、二年、三年、五年……。時間は進み、世界は移ろう。人々は過去を忘れていき、彼女もきつとすでに幸せになつている。都合の良い想像を巡らし変わらないものを望むのは、ご都合主義の夢に取り残された者の傲慢でしかない。だが、それなのにどうしても、私は私を止められない。いや、止めたくない。

これは告白だ。それも、きわめて遠回りで、いつそ単なる自己満足としか言いようのない。そしてだからこそ、私は何処にも彼女の名前を記さないし、いつか名乗り出ることもしない。

なぜならそれが、ひいてはこの告白に少しでも価値を与えてくれる条件であり。

詰まる所、私はいつでもいつも通りいつまでも、彼女にとっての私であり続けると言うことなのだ。

〈了〉